

ビバハウス便り 特別号外（北星余市高校教育実践シリーズ No.1）

創設期の北星余市高校教員、故伊藤英博先生の1周忌（11月18日）を真じかにして、ご遺族から「追悼文集」への寄稿を求められましたので、以下を書きました。今日のビバハウスの教育指導の原点に深く関わる事柄でもありますので、ご遺族のご了承を得て、特別号外として載せる事にしました。

「これぞまことの教育！さあみんなで体育館に行きましょう！！」

～真剣勝負の人 歴史的局面で北星余市の進路を示した伊藤先生～

青少年自立支援センター

安達 尚男 俊子

生徒たちが椅子を持ってぞろぞろと廊下を移動しているのが見えた。放送局を占拠した生徒会役員の「全校生の皆さんは、直ちに体育館に集まってください！」との呼びかけが、何度も繰り返された。私たち職員室にいた教員は、余りにも突然の事態に、何が起こったのかも、分からなかった。しばらくすると、「行った方が良いのかしら？」、「いや生徒の扇動に乗ってはならない！」などの喧きがおこり、どうして良いのか分からない数分間が続いた。

その時だった。「ばぁーん」と大きな手拍子がすると同時に、「先生方、これぞまことの教育、さあみんなで体育館に行きましょう！」との伊藤先生の大きな声が響いた。一瞬われに返った教員全員が、伊藤先生の後に続いて体育館に向かった。

生徒会役員の先導で、生徒たちは整然と体育館に集合していた。教員たちの集まるのを見届けた司会役の生徒が、「これから全ての先生方に、この学校はこのままでよいのか、一人ひとりに応えてもらいます。」と宣言した。この言葉を聴いて、私達は初めて、生徒たちが何のためにこのような突然の行動に走ったのかを理解できた。

北星余市高校は、昭和40年の4月、7名の新しい意欲に溢れた教職員のもと、老朽化し、立替のため使用されなくなった、町立小学校の廃校舎を仮校舎としてスタートした。第2次ベビーブームの終えん期に当り、希望する公立高校に入れなかった大量の「中学浪人」が生まれた時期であった。北星余市高の第1期生の大半は、希望の高校に入れなかったものや、他の高校を続けられなくなった生徒たちだった。

事件が繰り返され、なかなか正常な授業も成り立ちづらい状況でもあったが、創設期の教員たちは、理想に燃えて、困難にくじけない教育の実践に全力を挙げた。事件に対しても、ただ「処分」で対応するのではなく、「なぜ生徒がそのような事件を犯したのか？」、「どうしたら同じ事件を繰り返さなく出来るのか？」を長時間にわたって、時には深夜から早朝にまで渡って真剣に議論した。

しかしながら、高く掲げた「無処罰主義」の理想も、ひとつの事件の解決の付かないう

ちに、次々と新たな事件が起こり、全く対応も不可能になってしまった。「無処罰」の反動として、今度は事件解決のために、次々と「処分」を行わなければ乗り切れなくなってしまった。「血の弾圧」、「処分に次ぐ処分」が、本流になりかかっていた時期に、生徒たちが起こした「反乱」が、放送局の占拠だったのだ。

生徒たちは、「本当に自分たちの学校、北星余市はこのままでよいのか？」と、私たち教員に問うてきたのだ。生徒たちの質問は、全教員に対して、「あなたはどのようにして北星余市の教員になったのか？」、「現在のような処分に次ぐ処分のやり方でよいと思っているのか？」、「あなたはこれからどんな学校にしたいと思っているのか？」というものだった。

教師一人づつが順番に名前を呼ばれ、壇上に立たされ、この質問への答えを要求された。確かに形は、「人民裁判」と呼ばれても良いものだった。しかし私達は何よりも彼らの行動に、学校への熱い想いと、私達教師に対する確かな期待を全身に感じる事ができた。

私達の番が来た。緊張で身が震えたが、私達の北星余市にかけの思いのたけを必死で訴える事ができた。そして、こんなすばらしい生徒達とともに新しい教育を作り上げられる幸せを感謝したい気持ちでいっぱいになった。

「伊藤先生、本当にありがとう！」もしあの時、先生の一言がなかったら、北星余市はどうなってしまっただろう？ひょっとしたら、生徒がとんでもない事件を引き起こしたとして、いつものように、犯人探しをし、どんな処分が適切かを論議していたかも分からなかった。私たち全ての教師に、生徒たちの求めに応じて、真正面から彼らに立ち向かい、彼らの願いに応えうる教師になる機会を作ってくれた伊藤先生。

希望した高校に入れなかった自分たちを受け入れてくれた北星余市。この学校の生徒でありながら、次々と仲間を失っていくような学校生活はもうこれ以上ごめんだ。

大切な仲間と友情で結び合い、堅い団結で仲間を守りあう、そんな「仲間」、「友情」、「団結」をモットーとした「自主規律」胎動への基盤を準備した歴史的瞬間に、伊藤先生の勝負師としての日ごろから鍛え抜かれた勘・瞬発力が発揮されたのだ。生徒と教師が真剣勝負で切り結ぶ、「これぞまことの教育なのだ！」と。

東京オリンピックで、世界の柔道の覇者を目指した伊藤先生。その先生の夢と戦いは50年を迎えた北星余市で、新しい形でさらに大きく羽ばたいていく事を私達は信じて疑わない。その夢と願いの存続と発展を目指して、生き残った私達は更なる努力を貫く決意を先生のご霊前にささげたい。

伊藤英博先生略歴

- | | |
|-------------|--------------------------|
| 1939年12月10日 | 樺太最北端の炭鉱の町 塘路（とうろ）に生まれる。 |
| 42年6月 | 北海道芦別市、三井炭鉱へ移住。 |
| 56年12月 | キリスト教 洗礼を受ける。 |
| 57年4月 | 芦別高校定時制入学 |
| 60年4月 | 法政大学夜間部入学 |
| | 警視庁機動隊入隊（柔道指導） |

この間、東京オリンピック代表強化選手に選出されたが、靱帯切断により断念、北海道に帰る。

、 67年4月 北星学園余市高校教諭（社会科）

2013年11月18日（73歳） 肝臓がんにより召天

* 創設時の北星余市高校が掲げた、「無処罰主義」の教育方針は、当時、全道、全国の高校教育の優れた先導実践校であった、北海道深川西高校の実践に学んだものであった。最近出版された、「北海道深川西高校～あゆみ会事件・真実と平和を求めて～」文理閣 をご参照いただきたい。